

桜が見える丘で

～戸沢氏800年の物語～

西明寺小学校地域学校協働本部

はじめに

令和3年4月から、私たちは、仙北市地域学校協働活動推進員として、西明寺小学校で活動をしています。

私たちの主な活動は、子供たちが地域で学び、体験する『くりっこ探検隊』の活動プログラムの企画及び受入れ先との連絡調整になります。活動プログラムの企画にあたっては、学年ごとに『地域を知る』『地域を好きになる』『地域に^{こうけん}貢献する子どもを育てる』という学校経営方針に基づいたプログラムづくりを心がけています。また、プログラムによっては活動の理解を進め、定着させるため事前・事後学習も行っています。

その中で、6年生は戦国時代に^{かどやじょう}門屋城を築き、この地を約200年間^{おさ}治めた武将『戸沢氏^{とざわし}』の歴史を学びます。戸沢氏は、^{りょうない}領内の鉾山開発や^{しんでんかい}新田開発を行い、現在私たちが暮らすこの地域の^{いしづえ}礎を築いたといわれています。

さらに、^{とざわし}戸沢氏は戦国時代の三英傑(^{さんえいけつ}織田信長、^{おだのぶなが}豊臣秀吉、^{とよとみひでよし}徳川家康)といわれる、^{とよとみひでよし}豊臣秀吉、^{とくがわいえやす}徳川家康に仕え、^{つか}領国の拡大と安定を目指し、^{きたうらちほう}北浦地方(仙北市、旧中仙町の一部)を^{おさ}治めます。その後、^{りっしんしゅっせい}立身出世を果たし、最後は^{しんじょうはんしょだいはんしゅ}山形新庄藩初代藩主となり、^{めいじいしん}明治維新まで^{れんめん}連綿と続きました。

ところが、この活動を通して子供たちは勿論のこと、保護者や先生方の

多くの方々に、戸沢氏^{とざわし}が知られていないことに気付かされます。小学生も参加して行われていた、西木の夏祭り『戸沢氏祭^{とざわしまつり}』が新型コロナを機に途絶えたことも大きな要因の一つになっていたのかもしれません。ふるさとの礎^{いしづえ}を築いた戸沢氏^{とざわし}の歴史や功績^{こうせき}をどのようにして継承していくのが課題となりました。

そこで、学校からのアドバイスもいただき、戸沢氏^{とざわし}の人物やできごとを題材にして、人間模様^{にんげんもよう}を織り交ぜた戸沢氏^{とざわし}の物語をつくってみることにしました。

わかりやすく、興味をもって読めるように努めましたが、素人^{しろウト}の私たちには、これがなかなか大変な作業となりました。特に、歴史用語^{れきしやうご}を一つ一つ分かりやすい言葉で表現するには限界がありました。さらに、角館在^{かくだてざい}城^{じょう}以前の戸沢氏^{とざわし}に関する文献^{ぶんけん}はほとんどなく、いずれの記録も後年^{こうねん}に作成されたもので、年代や系譜^{けいふ}が異なっていたり、諸説^{しよせつ}あることにも悩まされました。それでも、秋田県史や町村史などの史料をよりどころとし、苦戦しながらも『桜が見える丘で』～戸沢氏800年の物語～をまとめ上げることができました。

この取り組みが、戸沢氏^{とざわし}を知る手掛^{てが}かりとなり、地域への郷土愛や誇りを醸成^{じょうせい}する役割を果たすことにつながれば、私たちにとっては何よりの喜びとなります。

この物語は、西明寺小学校のホームページに掲載されています。まずは、くりっこ(西明寺小学校の子どもたち)と保護者、先生方に読んでいただきたいと思います。そして、市民の方々へと広まっていくことを願っています。

最後に、この物語をつくるにあたって、ご助力をいただきました。その他、お世話になった方々に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

令和6年3月25日

西明寺小学校地域学校協働本部

※ 地域学校協働活動の新たな取り組みとして、令和6年度には西明寺地域運営体・保護者会・学校協働による「西明寺地区運動会」が行われることになりました。運動会には13代当主戸沢家盛と重臣6名が登場します。

目 次

初代	^{ひでもり} 衡盛	～ ^{とぎわし} 戸沢氏ここにはじまる～	 1
2代	^{かねもり} 兼盛	～ ^{おお う さんみやく こ} 奥羽山脈を越えて～	 4
8代	^{うじもり} 氏盛	～ ^{むろまちじだい しらいわし} 室町時代、白岩氏と戦う～	 9
13代	^{いえもり} 家盛	～ ^{みちび} 天の声に導かれ～	 10
18代	^{みちもり} 道盛	～ ^{じょけつ} 女傑と呼ばれた母と共に守り抜いたふるさと～	... 14
19代	^{もりやす} 盛安	～ ^{おにくろう か} 『鬼九郎』戦場を駆ける～	 17
20代	^{みつもり} 光盛	～ ^{い し つ} 兄の意志を継いで～	 23
21代	^{まさもり} 政盛	～ ^{ひやくしやう} 百姓の子として生まれて～	 25
31代	^{まさざね} 正実	～ ^{とうひこう} ラストサムライの逃避行～	 34

付 録

戸沢氏年表(系譜に見る戸沢氏)

戸沢氏系図

初代 衡盛

～戸沢氏ここにはじまる～

【父と母】

初代衡盛の父 平 通正は、平 清盛の従兄弟にあたり京都で生まれました。通正と清盛はとても仲が悪く、通正は戦いに敗れて、処刑されてしまいます。さらに、清盛は身ごもっていた通正の妻を、その父親である藤原雅邑に娘を殺害するよう命じます。それを知った家臣の田口氏は、自らの娘を身代わりとして殺害し、通正の妻を秘かに大和国(奈良県)尾輪村に逃しました。この地で衡盛は誕生します。

子供の頃から、衡盛は父の 仇 を討つため「打倒清盛」「打倒平氏」をめざし、剣の修行に励みました。

【源 頼 政】

衡盛23歳の時、平氏打倒を掲げて源 頼 政という人物が兵を挙げました。この人は、70歳を過ぎた老人でしたが、若い頃に鶴(頭はサル、体はタヌキ、手脚はトラ、しっぽはヘビで、トラツグミのような鳴き声)という妖怪を弓で射って倒したつわものといわれています。衡盛は、頼政の家来になり、打倒平氏を目指して戦闘に参加しますが、頼政が戦に敗れたため、衡盛は東国へ落ち延びていくことになりました。

【とざわし し そ たんじょう 戸沢氏の始祖誕生】

その後、^{ひでもり}衡盛は^{みなもとのよりとも}源 頼 朝 の^{い と こ き そ よしなか}従兄弟、木曾義仲の家臣となり、再び^{へいし}平氏
に挑みます。^{いど}義仲はある夜、^{よしなか}牛を集めてその^{つの}角に^{たいまつ}松明をくくりつけて突
進させ、^{へいしぐん}平氏軍をパニックに^{おとし}陥 れました。

^{よしなかぐん}義仲軍は、そのまま京都に入り、^{へいしぐん}平氏軍を^{さいごく}西国へ追いやることに成功し
ます。しかし、京の都に入った^{よしなか}義仲は、^{あばれ}ひどく暴 たり、^{むぼう}無謀な^ふ振る^ま舞いを
して都の人々に^{めいわく}迷惑を掛け始めるようになりました。

^{よしなか}義仲の行動に失望した^{ひでもり}衡盛は、^{よしなか}義仲を離れて^{みなもとのよりとも}源 頼 朝 に^{くらが}鞍替えし^{つか}仕える
ことになります。そして、^{よりとも}頼朝は、^{ひでもり}衡盛に^{おうしゅうこくしずくいし}奥州国 滴石(岩手県雫石)^{とざわ}戸沢
に^{りょうち}領地を与え、^{ひでもり}衡盛は自らの姓を「^{とざわ}戸沢」と改めました。こうして、^{とざわし}戸沢氏
の^{し そ}始祖が誕生したと伝えられています。

^{げんりやく}元暦2年(1185年)、^{ながとのくにあかがせきだんのうら}長門国赤間関壇ノ浦(山口県下関市)を^{ぶたい}舞台とし
た^{だんのうら}壇ノ浦の戦いで、^{ひでもり}衡盛は、^{よりとも}頼朝の弟 ^{みなもとのよしつね}源 義経らと共に、^{へいしついでう}平氏追討のた
め^{さいごく}西国に向かって^{かつせん}合戦に^{のぞ}臨みます。戦いは、^{げんじぐん}源氏軍の勝利に終わり、敗
れた^{へいし}平氏は滅亡します。ついに^{ひでもり}衡盛は、父の^{かたき}仇 であった^{へいしだとう}平氏打倒の
^{ひがん}悲願を達成したのです。

その後、^{ひでもり}衡盛は、近くに住む^{ごうぞく}豪族の^{といやまだんじょう}桶山弾正の娘と結婚し、その翌年
に息子の^{かねもり}兼盛が^{うぶごえ}産声をあげました。この子が^{のち}後に^{かどや}門屋の地に、^{とざわし}戸沢氏の

^{いしずえ}礎を築く運命の子であることを、まだだれも知る^{よし}由也没有せん。

2代 兼盛

～奥羽山脈を越えて～

【少年時代】

兼盛が生まれた頃、父衡盛は、近隣の南部氏と争うことが多く、衡盛は子の兼盛を、南部行光は実光をそれぞれ人質交換して、平和を保っていました。そんな中、兼盛が9歳になった時、衡盛は病に倒れます。そして、幼い兼盛のことを行光に頼んで亡くなります。享年43歳でした。

衡盛が亡くなると、南部氏は戸沢氏の家臣を管理し、重い年貢を押し付けるようになりました。そのため、戸沢氏の家臣らは、武士でありながら百姓（農民）同様、働かなければならなくなっていました。こうした貧しさに耐え忍ぶ生活の中にあっても、家臣たちは幼い兼盛の帰りを待ってじっと我慢していました。

【奥羽山脈を越えて】

兼盛は4、5歳の頃から、人質として南部家に預けられ、9歳の時に父を亡くし、その後も南部家の下に育ち、苦労を重ねた少年時代を過ごします。14歳になった兼盛は、南部家の館の火災を機に、南部領から滴石戸沢城に帰りました。家臣たちは皆喜び、りっぱに成長した彼を亡き父衡盛の姿に映したのかもしれない。

それからしばらくしたある日、兼盛^{かねもり}は狩^かりの山中^{さんちゅう}で、美貌^{びぼう}と気品^{きひん}に満ちあふ^{あふ}れた野菊^{のぎく}姫^{ひめ}と出会い、恋に落ちます。二人は将来を約束しますが、些細^{ささい}なできごとで別れてしまいます。

その後も、南部^{なんぶ}氏の理不^{りふ}尽^{じん}な要求は続きますが、兼盛^{かねもり}は断固^{だんこ}拒否^{きよひ}します。これに怒^{おこ}った南部^{なんぶ}氏は、大軍^{ひき}を率^{しずく}いて石戸^{いしと}沢城^{ざわじょう}に攻めてきました。敵^{もうこう}の猛攻^{もうこう}になすすべもなく、落城^{らくじょう}が迫^{せま}っています。兼盛^{かねもり}は、切腹^{せっぽく}を覚悟^{かくご}し刀^{かたな}を抜^ぬいたところ、老臣^{ろうしん}の竹林^{たけばやし}越前^{えちぜん}が、「殿^{との}、早^こまってはなりませぬ。山^こを越^こえて出羽^{でわ}国^{のくに}(秋田県)に行けばきっと道が開けるはずです。また、殿^{との}の味方^{みかた}になってくれる者もあらわれるでしょう」

と、逃亡^{とうぼう}を進めます。焼^やけ落^おちる城^{しろ}に、後^{うし}ろ髪^{がみ}を引かれながら、兼盛^{かねもり}は18人の家臣^{かしん}と共に、滴石^{しずくいし}を後^{あと}に奥羽^{おお}山脈^{うさんみやく}を越^こえました。

【運命の再会】

戸沢^{いっこう}氏^{けわ}一行は険しい山^こを越^こえ、玉川^{たまがわ}の鳳仙^{ほうせん}岱^{だい}(現玉川ダム)に着きました。この後、一行は上^{いっこう}桧木^{かみ}内^{のき}の戸沢^{いっこう}に進^{とぎわ}み、一旦^{いったん}ここ^こに腰^こを落^おち着^つかせます。兼盛^{かねもり}は、ここ^こで百^{ひゃく}姓^{しょう}のかたわら武芸^{ぶげい}にも磨^{みが}きをかけ、さらに資金を得るため、鉾^{こう}山^{ざん}(金山)の開発を行いました。この時、兼盛^{かねもり}の役に立ったのは、父衡盛^{ひでもり}が管理^{こうみやく}していた鉾脈^{こうみやく}のルートでした。家臣^{かしん}らを通じて息子の

かねもり
兼盛にも伝えられていたのでしょう。

しばらくして、かねもり かれん のぎく
兼盛は可憐に咲いている野菊の花を見つけて、あの野菊
ひめ
姫のことを思い出します。

のぎく
「野菊は、元気に暮らしているだろうか。たぶんいまごろ
多分今頃は、いい人とめぐ あ
巡り合い、
子供も生まれている頃だろう」

ひとり
と一人つぶやきます。それを聞いたかしん かねもり のぎくひめ
家臣たちは、兼盛の野菊姫を思う
さっ しずくいし のぎくひめ さが
気持ちを察して、滴石へ野菊姫を探しに行くことにしました。

かしん ひとり こ しずくいし のぎくひめ
家臣の一人が山を越えて滴石に入ると、野菊姫を見つけ出します。
のぎくひめ
野菊姫は、さらに美しく成長していました。

かねもりさま
「今でも兼盛様のことが忘れられない……」

かしん ひそ かみひのきない かねもり
と涙を流します。家臣は、秘かに彼女を上桧木内の兼盛のもとに連れ
て帰ることにしました。

のぎくひめ り り かねもり さいかい は
美しい野菊姫と凛々しい青年に成長した兼盛。運命の再会を果たした
ふたり
二人は結ばれます。その後、ふたりには6人の娘が誕生しました。6人とも
のぎくひめに かしん とつ かねもり かしん きずな
野菊姫似の美人で、それぞれを家臣に嫁がせ、兼盛と家臣たちの絆は
いっそう
一層深まりました。このことから、秋田美人のはっしょうち かみひのきない
発祥地は、上桧木内という
い つた
言い伝えがあります。

【門屋城主に】

かみひのき ない と ざわ
上桧木内戸沢での生活にも慣れてきた兼盛は、ここでくすぶっているわけにはいきません。

かねもり
兼盛は、かつて主人であった 源 頼朝の血をひく豪族本堂親朝(美郷町千畑)の家臣となり、飛躍のきっかけをつくりたいと考えていました。そこで、本堂氏の重臣である大館敦芳に推薦してもらい、親朝の家臣になると、門屋荘に領地を与えられました。兼盛は、最初小館城(石川原)に入りますが、かつて安倍氏の城郭があった場所に、門屋城を築城します。小館城には、家臣の小山田小平太が入り、小山田城と改めます。それ以来、この地域は、小山田氏に因んで、小山田と呼ばれるようになったといわれています。

【恩人の死】

かねもり
兼盛は、親朝の期待に応えて一生懸命働きました。そのため、親朝も彼のことを、とても気に入ります。そこで兼盛の息子に、自らの名前から一字授け「親盛」と名付けさせました。

ちかとも じゅうしん おおだて し おおえ し ふたり ちかとも
ところがある日、親朝の重臣である大館氏と大江氏の二人は、親朝を滅ぼし、本堂城を乗っ取ります。これには兼盛も大いに驚き、悲しみました。大館氏には推薦してもらった恩があるものの、親朝は主人です。二人

おん　いたばさ　なや　　おおだてし　　おおえし　　う
の恩の板挟みに悩みながらも、大館氏、大江氏を討つ決心をします。

かねもり　ほんどうじょう　ちかとも　　ひそ
兼盛は本堂城に親朝の妻と、その幼い子供が潜んでいることを聞き、
助け出して大館氏、大江氏を攻め討ち取りました。兼盛は、本堂城を
しゅうちく　ちかとも　　ほんどうし　　かしん
修築し、親朝の妻子を迎えて安心させたことから、本堂氏の家臣たちは
みな
皆戸沢氏へ心を寄せるようになりました。

このできごとは、かねもり　　お　　た　　くなん　　みが
の幼い頃の生い立ちや、あらゆる苦難によって磨
き上げられた、かふう　　じ　　ひ　　れんびん
戸沢家の家風『慈悲憐憫』（注1）を基にした、よい政治が
行われたことをものがた
物語っています。

かまくらじだい　　かねもり　　はらん　　と　　まく
鎌倉時代の中ごろ、兼盛は、73歳で波乱に富んだ人生に、幕を下ろし
ます。おお　　う　　さんみやく　　こ　　た
奥羽山脈を越えたあの日から、56年の歳月が経っていました。

（注1） 領民や他者の苦しみに寄り添い、その苦しみを和らげることを心から願い、
一緒に苦しみの原因を取り除き、希望を与えることをいう。

8代 ^{うじもり}氏盛

^{むろまちじ だい} ~室町時代、^{しらいわ し}白岩氏と戦う~

8代城主^{うじもり}氏盛は、^{しらいわじょうしゅ}白岩城主の^{しらいわもりくに}白岩盛国と戦います。この戦いで、^{やつやなぎ}八柳
^し氏と^{おのわ し}尾輪氏が^{だいかつやく}大活躍します。^{うじもり}氏盛は^{もりくに}盛国に、

「あなたは^{ぶじゅつ}武術にすぐれ、勇気があり、強くて勇敢な人です」

と手紙を送ります。^{もりくに}盛国は、この手紙に感激して、

「^{ゆみや と}弓矢を取って^{こうふく}降伏します」

と、^{かしん}戸沢氏の家臣になることを伝えます。^{うじもり}氏盛は大いに喜び、^{もりくに}盛国をそ
のまま^{しらいわじょうしゅ}白岩城主に^す据え置き、^お自分の^{もりくに}娘を盛国の子、^{やじゅうろう とつ}弥十郎に嫁がせまし
た。こうして^{せいりよくか}戸沢氏の勢力下に入った^{もりくに}盛国は、長く^{ひと}戸沢氏と行動を一つに
しています。

13代 家盛^{いえもり}

～天の声に^{みちび}導かれ～

父^{とよもり}豊盛と母^{ほんどうちかきよ}本堂親清の娘から生まれた家盛^{いえもり}は、幼い時父が亡くなり、
叔父^{おじ}の泰盛^{やすもり}が、一時^{いちじ}戸沢^{とうしゆ}氏の当主になります。やがて、家盛^{いえもり}が成人を迎
えると、叔父^{おじ}からその座^{ゆず}を譲^うり受けます。

【門屋^{かどや}から角館^{かくだて}へ】

当時、角館^{かくだて}で勢力^{せいりよく}を誇^{ほこ}っていた伝^{でん}、菅^{すが}、鈴木^{すずき}の3氏は、横手^{よこて}の小野寺^{おのでらし}氏
と交流があり、戸沢^{せいらく}氏とは対立関係にありました。しかし、戸沢^{せいらく}氏の勢力
が拡大^{かくだい}するにつれ、戸沢^{せいらく}氏に、
「兜^{かぶと}を脱^ぬぎ、降参^{こうさん}して忠義^{ちゅうぎ}に励^{はげ}みます」

と申し出ます。戸沢^{きゅうりょう}氏は、3氏に旧領^{きゅうりょう}を与えてこれを許し、角館^{かくだて}を手
入れることになりました。その後、伝^{でん}、菅^{すが}、鈴木^{すずき}の3氏は、戸沢^{おんじょう}氏の温情^{おんじょう}に
応^{こた}え、忠実^{ちゅうじつ}な家臣^{かしん}として、戸沢^{つか}氏に仕えたといわれています。

戸沢^{かくだてにゆうじょう}氏には、角館入城^{かくだてにゆうじょう}の際に、不思議^{いつわ}な逸話^{いつわ}が残されています。ある
夜、家盛^{いえもり}は再^{ふた}び、不思議^{ゆめまくら}な夢^{ゆめまくら}を見ます。あの老人^{ゆめまくら}が夢枕^{ゆめまくら}に立ち、

「門屋^{かどや}に住んでいると、子孫^{しそん}は絶^たえる。角館^{かくだて}に移せば、子孫^{しそん}は盛^{さか}える。
汝^{なんじ}日頃^{ひごろ}慈悲^じ憐憫^{れんぴん}の心^{こころ}深^{ゆえ}き故^{てん}、天^{てん}我^がを使^{つか}わして告^つげる」

と告^つげました。家盛^{いえもり}は、このお告^つげに悩^{なや}みます。

なや なや いえもり かくだて
悩みに悩んだ末、家盛は角館に移ることを決意します。かしん りょうみん
家臣や領民は驚
きますが、いえもり
家盛の決心の固さに皆納得します。りょうみん
領民も今までお世話にな
った”お館様“をえがお
笑顔で送り出そうと決めました。いえもり かしんだん つた
家盛は、家臣団に伝わ
るこやまだ
「小山田ささら」というししま
獅子舞いを、りょうみん でんじゅ
領民に伝授することにしました。

いえもり
出発の日、家盛の前でりょうみん おそ
領民は教わったこやまだ
「小山田ささら」をひろ
披露します。
ひとりひとり いっしょうけんめい いえもり せんじん りょうしゅ
一人一人が一生懸命、家盛や先人の領主に対する感謝の気持ちを込め
てま
舞いました。やがてどこからともなく、
やかたさま
「お館様ありがとう」

やかたさま
「お館様がんばれ」

りょうみん
と領民の声がわあ
湧き上がります。これにはさすがのいえもり
家盛の目にも光るも
のがありました。かしん ひとり
家臣の一人が、
との
「殿、泣いているのですか？」

いえもり
とからかうと、家盛は、
ちり
「目に塵が入っただけじゃ。みな
皆のことは決して忘れぬぞ」

かくだて いえもり かしん りょうみん
と、角館へ向かう家盛と家臣一行の姿が見えなくなっても、領民の
かんせい
歓声と、ささらのね な や
音は鳴り止むことはありませんでした。

とざわしまつり
平成8年に誕生した『戸沢氏祭』は、このできごとを再現したにしき
西木の夏
祭りです。

かくだて にゅうじょう
角館に入城して一年後の秋、大地震が起き、かどや
門屋地方は地形が変わ
るほどの大きな被害がありましたが、かくだて
角館地方はそれほどの被害もなく、
すんだといわれています。家盛は、これも神のご加護によるものとして、
神様をあつまつ
篤く祀ったといえます。

【かすみ むち 霞の鞭】

ある日、いえもり ゆめまくら
家盛の夢枕に、しら が ひげ
白髪で髭をたくわえた老人があらわ
現れました。
われ てんじん
「我は、天神である。我が社に参拝すると、ぬし
お主に特別な力を与えよう」
と告げ、姿を消します。

「これはきっと、良い夢に違いない」

いえもり かしん つ にしだててんじん
と、家盛は家臣数人を連れて、西館天神へお参りします。すると、どう
お堂
の中に五寸五分(16.7cm)のむち そな
鞭が、供えられていました。

「これぞ、てんじんさま
天神様からの贈り物」

いえもり かくしん ひのき ない せんとう
と、家盛は確信し持ち帰ります。その後、桧木内で敵と戦闘になった時、
てんじんさま さず むち てきかた かすみ
天神様から授かった鞭を振ったところ、敵方の前に霞がかかり、敵が
みうご
身動きとれなくなったところをせめ、勝利をおさ
治めました。このことからこの
むち かすみ むち かほう
鞭を『霞の鞭』と呼び、戸沢家の家宝にしました。また、敵をやぶ
破った場所
には、かすみ だ
霞田という地名がつけられました。

【^{かどやし}門屋氏】

^{いえもり}家盛が^{かくだてじょう}角館城に移った後、^{かどやじょう}門屋城には一門の^{いちもん}戸沢^{とざわよりもり}頼盛が入ります。^{より}頼

^{もり}盛は、姓を^{かどやよりもり}門屋頼盛と改めこの地域を^{おさ}治めます。

^{かどやし}門屋氏は、戸沢氏を^{ささ}支え、多くの^{いくさ}戦で^{てがら}手柄をあげます。そして、戸沢氏

の^{ひたちのくにまつおか}常陸国松岡(茨木県高萩市)へ^{くにが}国替えの時にも、戸沢氏と共にこの地

を離れ、最終的には山形の^{しんじょう}新庄に移り住むことになります。

^{え ど じ だ い}江戸時代の^{こうき}後期、この一族から^{かどやようあん}門屋養安という人が出ています。この

人は久保田藩直轄の^{いんないぎんざん}鉾山、院内銀山(湯沢市)の^{かか}お抱え^{かつやく}医師として活躍

します。また、養安の日記「^{かどやようあんにつき}門屋養安日記」は、当時の様子を知るための

^{きちょう}貴重な資料として、現代に伝わっています。

なお、^{さいみょうじあらまち}西明寺荒町出身の作家^{にしきまさあき}西木正明氏は「^{ようあんせんせい}養安先生、^よ呼ばれ!」とい

う小説の中で、^{かどやようあん}門屋養安を紹介しています。^{ようあん}養安のご子孫は、現在^{しそん}神奈川県

にお住いのようです。

また、現在^{かどやじょうし}門屋城址の^{しゅうい}周囲に住み、姓を^{かどわき}門脇と^{な の}名乗る方々は、^{かどやし}門屋氏

の^{かしん}家臣と考えられています。

18代 ^{みちもり}道盛

～女^{じょ}傑^{けつ}と呼ばれた母と共に守り抜いたふるさと～

【^{おじ}叔父^{うらぎ}の裏切り】

^{みちもり}道盛は、父^{ひでもり}秀盛と母^{ならおかながひろ}櫛岡長裕の娘(通称「^{ならおか ご け}櫛岡後家」)との間に、^{かくだて}角館で生まれます。

^{みちもり}道盛が6歳の時に、父が亡くなり家を継ぐことになるのですが、まだ幼かったため、^{よどがわじょうしゅ}淀川城主(大仙市協和)で^{おじ}叔父にあたる^{とぎ わただもり}戸沢忠盛が、その^{こうけん}後見人になり政治を行いました。^{ただもり}忠盛はとても^{やしん}野心のある人で、^{みちもり}道盛が成人してからも、その地位を手離そうとはしませんでした。^{あげく}挙句の果てに、^{いえ の と}お家乗っ取りを企て、^{くだ}道盛とその母を^{みちもり}角館城から^{かくだてじょう}追放してしまいます。

^{ならおか ご け}櫛岡後家は、^{じっ か}実家の^{ならおか}櫛岡氏(大仙市南外)に助けを求め、さらに^{ろくごう し}六郷氏、^{ほんどう し}本堂氏、^{しらいわ し}白岩氏ら^{こくしゅ}周辺の^{じゅうしん}国守、^{けっそく}重臣と^{かくだて}結束して、^{の と}角館を乗っ取った^{ただもり}忠盛に^{ただもり}圧力をかけます。その結果、^{よどがわじょう}忠盛が^{たいきやく}淀川城へ退却することで決着しました。

【^{ならおか ご け}櫛岡後家】

しかし、この^{そうどう}騒動に^{じょう}乗じて、^{よこてじょう}横手城の^{お の で ら かげみち}小野寺景道が^{かくだてじょう}角館城を^{こうげき}攻撃するため、^{たいぐん}大軍で^お押し寄せてくるとの^よ情報が入ります。^{かしんだん}家臣団は、「^{こうふく}降伏しましょう」

うった
と訴えますが、^{ならおか} 榎岡^ご 後家は、

「いまさら ^お の ^で ら ^{まつだい} に従えば末代まで ^{あざけ} 嘲 ^{わら} り笑われる。私は ^{みちもり} 道盛と一緒に、
城を枕にここで死にます」

^{げき} と ^{かしんだん} 家臣団も ^{ふる} 奮い立ち、

「我も、共に死にます」

「わしらは、^{みちもりさま} 道盛様と ^{いっしんどうたい} 一心同体じゃ」

^{いっちだんけつ}
と一致団結して、戦う道を選びました。

^{かくだてじょうほういせん}
【角館城包囲戦】

^お の ^で ら ^し ^{せんぼつたい} 小野寺氏の先発隊は、^{かくだて} 角館の ^で 南の ^で 出城である ^{まつ} 松 ^が ケ ^{さきじょう} 柵城に ^{こうげき} 攻撃を仕掛
け、^{かつせん} 合戦の火ぶたが切られます。^{かくだてじょう} 角館城は、^お の ^で ら ^{ぐん} 小野寺軍に囲まれてしま
いました。ここで ^お の ^で ら ^{ぐん} 小野寺軍は、^{ちから} 力 ^ぜ 攻めから ^{ひょうろう} 兵糧攻めの作戦をとり、3か月に
及んで包囲し、そのまま秋、冬がきて正月を迎えます。

いよいよ食料が^{とぼ} 乏しくなってきたことから、^{みちもり} 道盛は ^{かしんだん} 家臣団と話し合い、
近くの ^{ならおか} 榎岡氏、^{ほんどう} 本堂氏、^{ろくごう} 六郷氏、^{しらいわし} 白岩氏の各氏に応援を求めます。これに
^{こた} 応えて、各氏とも助けの兵士を送り、^お の ^で ら ^{ぐん} 小野寺軍の ^{はい} 背後から ^{おそ} 襲いました。こ
れには ^お の ^で ら ^{ぐん} 小野寺軍もたまず、兵を引き上げ、^{りょうぐん} 両軍引き分けに終わります。

苦戦しながらも”^{じょけつ} 女傑“と呼ばれた母と共に、^{みちもり} 道盛は ^{かくだて} 角館を守り ^ぬ 抜きま
した。^{きょうてき} 強敵 ^お の ^で ら ^し 小野寺氏を向こうに回し持ち ^も 堪 ^{こた} えたこの力が、^{みちもり} 道盛の次の代

になって、一^{いっき}氣に花^{はな}開^{ひら}きます。

いよいよ『鬼^{おに}九^{くろ}郎^う』盛^{もり}安^{やす}の登場です。

19代 ^{もりやす}盛安

～『^{おにくろう}鬼九郎』^か戦場を駆ける～

【^{おにくろう}鬼九郎の^{たんじょう}誕生】

^{もりやす}盛安は、^{れきだい}戸沢氏歴代の中で、とびぬけて^{すぐ}優れた人物といわれています。

^{みちもり}父道盛と^{ほんどうちかえだ}母本堂親条の子として生まれ、父が52歳で^{いんきょ}隠居したあと、病

^{もりしげ}弱な兄盛重に代わって、13歳の若さで^{とうしゅ}当主になりました。^{しだい}次第に、またの

名を『^{おにくろう}鬼九郎』と呼ばれるほど、^{いさ}勇ましい若者に成長していきます。

【^{おだのぶなが}織田^{たか}信長の鷹】

^{かくだて}角館周辺では、^{たか}鷹狩りに使うよい^{たか}鷹が^と捕れました。これを求めて京都の

商人である^{たなかせいろう}田中清六は、しばしば^{かくだて}角館を^{おとず}訪れています。彼は商人ながら

^{おだのぶなが}織田信長、^{とよとみひでよし}豊臣秀吉、^{とくがわいえやす}徳川家康など時の権力者に仕えた人物で、中央の

^{もりやす}情報を盛安に詳しく伝えて、^{げきどう}激動の^{らんせい}乱世を^{いぬ}生き抜く^{ほうさく}方策をアドバイスしま

した。盛安は^{おだのぶなが}織田信長に^{たか}鷹を贈っていますが、これは^{たなかせいろう}田中清六の^{じょげん}助言が

あったものと思われます。^{ししや}使者は^{おおまがりじょうしゅまえ}大曲城主前田^{ださつま}薩摩が選ばれました。

【^{まえださつま}前田^{いんぼう}薩摩の陰謀】

^{まえだし}前田氏は^{にしあらいふるだて}西荒井古館に住んでいましたが、^{おおまがり}大曲に移り城を築きます。

^{さつま}薩摩の^{みちのぶ}父道信の代になり^{ゆりちほう}由利地方を^{こうげき}攻撃しますが、^{あかおつ}赤尾津、^{はがわ}羽川両氏と

の戦いで、^{みちのぶ}道信は^{なが}流れ^や矢に当たり死んでしまいます。

子の薩摩^{さつま}は、飛ぶ鳥^{いきお}の勢い^{もりやす}のある盛安^{もりやす}につき、戸沢勢^{ゆり}の力を借り由利^{ゆり}を攻めます。そして、前年^せは赤尾津左衛門^{あかおつぎえもん}を、翌年^{はがわじろう}には羽川二郎^{はがわじろう}を倒しついに長年^{うら}の怨みを晴らしました。

そんな中、薩摩^{さつま}は盛安^{もりやす}の使者^{ししや}として、信長^{のぶなが}にお目通り^{めどお}を許され、鷹^{たか}を贈ります。ところが、信長^{のぶなが}の権力に目がくらんだのか、何と薩摩^{さつま}は戸沢^{さつま}の名を出さず、「出羽国^{でわのくに}(秋田県)仙北^{せんぼく}の領主^{りょうしゅ}前田^{まえだ}薩摩^{さつま}」と名乗り、献上品^{けんじょうひん}は自分のものと偽り^{いつわ}、信長^{のぶなが}から所領安堵^{しりょうあんど}の書状^{しよじょう}を受け取ります。主人^{しゅじん}をだまし、戸沢氏^とに取って代わろうとする作戦^かにでたのでした。

「これで仙北^{せんぼく}は、わしのものだ。盛安^{もりやす}め！ 若造^{わかぞう}のくせに『鬼九郎^{おにくろう}』などとぬかしおって、小生意気^{こなまいき}な。これからの仙北^{せんぼく}は前田様^{まえださま}の時代^{じだい}じゃ」

と、意気揚々^{いきようよう}と帰途^{きと}につきます。そんな薩摩^{さつま}を待っていたのは、予想もしない悲劇^{ひげき}でした。山形^{やまがた}と秋田^{あきた}の境^{さかい}に来た時、由利^{ゆり}の軍勢^{ぐんぜい}が大曲^{おおまがり}を襲うという噂^{うわさ}を耳^{みみ}にしたのです。

「なんと…」

馬^{うま}を飛ばして駆け付けた薩摩^{さつま}の前^{まえ}にあったのは、焼け落ちた大曲^{おおまがり}城^{じょう}と弟^{まへだ}前田五郎^{ごろう}の無残^{むざん}な死^しでした。

薩摩^{さつま}の陰謀^{いんぼう}は、田中清六^{たなかせいりく}の報告^{ほうこく}によってばれてしまいますが、なぜか薩摩^{さつま}は処罰^{しよばつ}を受けることもなく、その後^{のち}も戸沢氏^{かしの}の家臣^{かしん}として、仕え^{つか}てい

ます。しかし、江戸時代に前田家の子孫が絶えた時、このできごとが蒸し
返され、家名存続は許されませんでした。

【阿気野の戦い】

横手城主の小野寺義道は性格に問題があり、家臣団に不満がくすぶっ
ていました。その情報を耳にした盛安は、家臣の櫛岡氏の進言もあり、
小野寺氏の支城沼館城（横手市雄物川町）を攻めるため出陣します。こ
れを知った城主の大築地秀道は、家臣の小清水充盛を出陣させ、阿
気野（横手市大雄）で迎え撃とうとします。

両軍は始め弓矢で争い、戸沢軍の先手である櫛岡勢と小清水勢が
戦闘に入り、櫛岡勢が撃ち負け引くところに、盛安は門屋氏、小山田氏、
白岩氏らに前進を命じました。小清水充盛は馬にまたがり、盛安を討ち
取ろうと突進してきます。ここで、盛安は大太刀で、小清水の兜から膝の
あたりまで斬り倒すと、形勢は一気に戸沢軍有利となりました。

戦いは、戸沢軍の圧勝でした。家臣の多くは、

「このまま沼館城を攻撃しましょう」

と進言しますが、横手の小野寺軍が大軍を率いて沼館城へ救援に向
かったとの報告に、矛を収め角館へ帰りました。この戦いで、盛安は
『鬼九郎』又は『夜叉九郎』の異名をとり、近隣の領主らに恐れられるよう

になりました。

かくだて
角館周辺では、元気のよい、たくましい若者を「オニグロ」と呼んでい
るそうです。これはゆうもう おにくろう いみょう とざわもりやす ゆらい
勇猛な鬼九郎の異名をとった、戸沢盛安に由来すると
いわれています。

【野 望】

もりやす やぼう せんぼくへいや ながねん
盛安は、野望をもって仙北平野に進出します。長年のライバルであった
おのでらし
小野寺氏との対立が深まる中、山形のもがみし れんけい おのでらし きょうい
最上氏と連携し、小野寺氏に脅威
を与えていきます。そんな中、秋田のあんどうし
安東氏が一転して、おのでらし
小野寺氏と
どうめい むす からまつ の いくさ げきせん
同盟を結んだことから、唐松野(大仙市協和)で戦となり、激戦の末、戸
沢氏は勝利をおさ
を治めました。

もりやす そうだいしょう つね じんとう ひとり ぐんぜい
盛安は、総大将ながら常に陣頭に立ち、一人で馬に乗って敵の軍勢の
中にとつにゆう
突入するという、あらむしや
荒武者であったといわれる一方で、ほりよ
捕虜の兵は、斬
らずにに
逃がすなど、優しい一面もあったといわれています。

【小田原参陣】

その頃、中央ではほんのうじ へん おだのぶなが たお てんか
本能寺の変で、織田信長が倒れた後、天下取りに名
をあげたのはあ とよとみひでよし ひでよし しこく きゅうしゅう へいてい
豊臣秀吉でした。秀吉は四国、九州を平定すると、いよいよ
ぜんこくとういつ
全国統一が見えてきます。彼に従わない大名は、だいまよう かんとう おだわらじょうしゅ
関東の小田原城主
ほうじょうし とうほく だいまよう ひでよし かんとう ほうじょうし とうぼつ
北条氏と東北の大名だけでした。秀吉は関東の北条氏の討伐を決定す

ると、

「俺に従う者は、小田原^{おだわら}に來い。従わぬ者は、お家^とを取り潰^{つぶ}す」

と全国^{だいみょう}の大名^{げき}に檄をとばします。

天正^{てんしょう}18年(1590年)、秀吉^{ひでよし}の小田原^{おだわら}征伐^{せいぱつ}が始まります。盛安^{もりやす}は、田中^{たなか}

清六^{せいろう}の情報^{じょうほう}をもとに、東北^{とうほく}の大名^{だいみょう}としては、真^まっ先^{さき}に小田原^{おだわら}に向かうこと

を決めました。家臣^{かしん}9人を引き連れ、素性^ひを隠^{かく}すために商人^{すじょう}の姿^かに変装^{へんそう}

して、敵中^{てきちゅう}を潜^{くぐ}り抜けていきます。その途中^{とちゅう}、山形^{やまがた}酒田^{さかた}の船宿^{ふなやど}加賀^か谷^や与^よ

助^{すけ}の手引^{てび}きで、秋田^{あきた}土崎^{つちぎき}港^{こう}から酒田^{さかた}へ着きます。そこでは、旅費^{りょひ}が不足

しましたが、与助^{よすけ}からお金を借りて、無事^{ぶじ}に目的地^{もく的地}までたどり着^つくことができました。

盛安^{もりやす}が遠江^{とお}国^{くに}(静岡県)の金谷^{かなや}宿^{じゅく}に着いた時、秀吉^{ひでよし}はすでに大井川^{おおいがわ}

を越え、島田^{しまだ}にいました。当時^{たうじ}の大井川^{おおいがわ}には橋はなく、しかも大井川^{おおいがわ}は大

雨^{ぞうすい}で増水^{ぞうすい}していて、とても川を渡れる状態ではありませんでした。さらに、

周辺^{しゅうへん}は日が暮^くれてうす暗くなっています。

「明日^{あす}、水^{みづ}が引^ひいてから渡^{わた}ることにしましょう」

と、盛安^{もりやす}に進言^{しんげん}する家臣^{かしん}たちに、

「秀吉^{ひでよし}様^{さま}に忠義^{ちゅうぎ}を示すため、出羽^{でわ}から駆^かけ付^つけてきた。一夜^{いちや}たりとも遅^{おく}れ

てはならぬ。これ^{ぞうすい}ぐらいの増水^{ぞうすい}などには負けぬ」

と言って、ふんどし一丁になり家臣の制止を振り払い、根性で川を泳いで渡り切ってしまいました。そして、ぬれた体のまま秀吉の前に現れます。

「出羽国角館の住人、戸沢盛安、参陣つかまつりまする」

と大声であいさつすると、秀吉は大いに喜び、

「何と、頼もしい男じゃ」

と、腰刀『備前兼光』を授け、所領安堵します。

「秀吉様が、仙北領地の所有を承認し、保証してくれた。角館の城は守られたぞ。これで村の者は、みな一緒に仙北で生きられる」

と喜び合いました。しかし、喜びもつかの間、この強行がたり、盛安は陣中で突然体調を崩し、回復することなく24歳の短い人生に終わりを告げます。

乱世に生まれ、戦国の世をかけ走るかのように、合戦に明け暮れた盛安の壮絶な人生でした。

20代 ^{みつもり} 光盛

～兄の意志を継いで～

【兄の急死^{きゅうし}】

^{もりやす} 盛安の急死により、^{かしん} 家臣たちは^{どうよう} 動揺しますが、^{とうしゅ} ともかく新しい当主を立てなくてはなりません。^{こうほ} 候補に^{もりやす} 盛安の弟で15歳の^{みつもり} 光盛と、^{もりやす} 盛安の子どもで、6歳の^{まさもり} 政盛が^あ 挙がりました。^{かしん} 家臣は^{おさな} 幼く、^{せいさい} しかも正妻の子ではない^{まさ} 政盛より、^{みつもり} 光盛が^{みつもり} ふさわしいと光盛を選びました。

^{みつもり} 光盛は、^{もりやす} 盛安のような^{ゆうもう} 勇猛な性格ではありませんでしたが、とても^{やさ} 優しく、^{かしんおも} 家臣思い、^{りょうみんおも} 領民思いの^{とうしゅ} 当主でした。

【天室祖母^{てんしつそぼ}】

しかし、この時、事件が起こります。^{とぎわあわ} 戸沢安房という人物が、^{もりやす} 盛安の兄^{もり} 盛重の子を^{とうしゅ} 当主に^{ゆず} 譲るように^{しんげん} 進言します。これを^{ちゅうしん} 忠臣の^{かどやむねもり} 門屋宗盛が^{だんこ} 断固^{きよひ} 拒否しました。これに^{とぎわあわ} 腹を立てた戸沢安房は、^{かどやむねもり} 門屋宗盛を^{さつがい} 殺害し^{とうしゅ} 当主の交代を^{かしんだん} 主張しました。それでも、家臣団は^{いっちだんけつ} 一致団結します。^{みつもり} 光盛に^{みかた} 味方して、事件はこれ以上^{とぎわあわ} 発展せず、戸沢安房も戸沢家から^{ついほう} 追放されました。

^{かどやむねもり} 門屋宗盛には、^{まさもり} 政盛(後に当主になる)と同じ歳の孫がいました。この孫は、^{そふ} 祖父の^{むねもり} 宗盛が^{きおく} 殺された幼い頃の記憶として、「^{うば} 乳母に^だ 抱かれ、^の 後ろの山より^{しのびおち} 忍び落ちて、^{ころぼそ} 心細かった」と述べています。^{のち} 後に、^{まさもり} 政盛が^{くにが} 国替えに

より新庄藩主になると、夫の梅沢氏と共に、新庄に移り「天室祖母」と呼ばれるようになります。

まさもり
政盛は、

かどやむねもり ちゅうぎ
「門屋宗盛は忠義の人だった」

てんしつ そ ぼ ねぎら あつ
と、天室祖母を 労い厚くもてなしたといわれています。

みつもり
【光盛の死】

とよとみひでよし ぜんこくとういつ たっせい
豊臣秀吉は全国統一を達成すると、さらに明(中国)も征服しようと考えます。手始めに、朝鮮を攻めることにしました。ここで、再び全国の大
名に、

「我のもとに集まれ。命令に従わない奴は、お家を取り潰すぞ」

ごうれい かとく つ みつもり かしん ちょうせん
と号令をかけます。家督を継いだ光盛は、さっそく家臣と共に、朝鮮
しゅつぺい ひでよし ぜんせん き ち きゅうしゅう な ご や
出兵のため秀吉が前線基地とした、九州名護屋(佐賀県)へ向かいます。

とちゅう ばんしゅうひめ じ てんねんとう ほうそう わずら な
ところが、途中、播州姫路(兵庫県)で天然痘(疱瘡)を患い、17歳で亡
くなってしまう。

みつもり ぜんしょうじ まいそう みつ
光盛は、禅昌寺というお寺に埋葬されました。そのこともあってか、光
もり ぼ せ き けず てんねんとう よ みんかんしんこう
盛の墓石を削ると、「天然痘除け」のお守りになるという民間信仰がある
そうです。盛安、光盛と立て続けに当主が亡くなり、戸沢家に再び暗雲
ただよ
が漂い始めました。

21代 政盛^{まさもり}

～百姓^{ひやくしやう}の子として生まれて～

【運命の子】

もりやすさま みつもりさま
「盛安様^{もりやすさま}に続き、光盛様^{みつもりさま}までが…」

「こうなったら、当主^{とうしゅ}はあの方^{かた}しかおるまい」

「あの方^{かた}か…」

かしんだん おもくる
家臣団^{かしんだん}の中に、重苦しい^{おもくる}空気が流れます。

みつもり もりやす まさもり かとく つ
光盛^{みつもり}の死後^{しご}、盛安^{もりやす}の子政盛^{まさもり}が、7歳^{ななさい}で戸沢氏^{かどく}の家督^つを継ぎました。

まさもり もりやす たか が み そ こそめざわ
政盛^{まさもり}の母は、盛安^{もりやす}が鷹狩^{たか が}りに出た時に見初めた^み、小古米沢^{こそめざわ}(大仙市西

仙北^{せんぺく})の百姓^{ひやくしやう}源左衛門^{げんざゑもん}の娘^{むすめ}(通称甘酒さん子^{かんしゅさんこ})といわれています。この

女性^{おんな}は、百姓^{ひやくしやう}の身分のため、お城にのぼることはありませんでした。

のち まさもり つ ひやくしやう いとな やまぶし とうこうぼう とつ たはた
後に、政盛^{まさもり}を連れて、百姓^{ひやくしやう}(農業)を営む山伏^{いとな}の東光坊^{やまぶし}に嫁ぎ、田畑^{とうこうぼう}

たがや く まさもり もりやす おとず
を耕す^{たがや}暮らしを続けました。幼い政盛^{まさもり}も、父の盛安^{もりやす}を訪れる^{おとず}ことはなかつたのです。

かしんだん ようふ とうこうぼう たず
家臣団^{かしんだん}が、養父^{ようふ}の東光坊^{とうこうぼう}の家を訪ね、

まさもり とうしゅ むか
「政盛^{まさもり}を、戸沢家^{とうしゅ}の当主^{むか}に迎えたい」

と申し入れます。話を最後まで聞いた東光坊^{とうこうぼう}は、

「血のつながりがないとはいえ、一緒^{いっしょ}に暮らす^くうちに情^{じやう}が移ってしまった。

まさもり
政盛に刀を振りかざす、武士の世界などへ送り出したくはない」

かしんだん
と、家臣団の申し入れを拒否すると、むざん
無残にも斬られてしまいます。まさ

もり
盛は、ゆうかいどうぜん
誘拐同然にかくだてじょう
角館城に連れて行かれました。

みつもり
光盛の死がなければ、まさもり
政盛は名も知れず、たはた
田畑と共にいっしょう
一生を暮らす人
生だったかもしれません。しかし、運命はそれを許しませんでした。

城では、今はいんきょ
隠居の身のそふ
祖父、みちもり
道盛が待っています。どことなく子供の
もりやす
頃の盛安におもかげ
面影が残っているまさもり
政盛に、しゅくん
主君のあ
在り方やかた
乱世のらんせい
生き方につ
いてかた
語り始めました。みちもり
道盛は、この孫にたく
戸沢氏の運命を託したのでしょうか。

ふううんきゅう
【風雲急を告げる】

いえそんぼう
お家存亡のきき
危機に、かしんだん
家臣団はとよとみひでよし
豊臣秀吉に、まさもり
政盛をこうけいしゃ
後継者として認めて
くれるようお願い出ます。さいわ
幸い許しがひでよし
出たものの、めい
秀吉の命により、ぼし
母子
どうはん
同伴でじょうらく
上洛することになりました。

まさもり
政盛の実母は、じつぽ
百姓ひやくしやう
暮らしであるため、とてもだいまよう
大名の母親には見えま
せん。そこで、やむをえ
ずならおかみつよ
檜岡光清の娘で、こくないずいいち
国内随一の美女とうたわれ
たおおもりごぜん
大森御前をした
母親に仕立てて、ひでよし
何とか秀吉にえっけん
謁見することができました。
さらに、もりやす
盛安とみつもり
光盛兄弟のぐんこう
軍功を知るとくがわいえやす
徳川家康のはか
計らいにより、ひでよし
秀吉か
きゅうりよう
ら旧領の所有とあとめそうぞく
跡目相続のしゅいんじよう
朱印状を受け取ることができたのです。

まさもり
政盛はじょうらく
上洛する前に、一度生まれ故郷のこきよう
小古米沢にこごめざわ
里帰りします。そ

の際、桜の木を一本丘の上に植えて出発したといひます。桜は、大きく成長して、毎年良い花を咲かせ、村人は申松桜（申松は盛安の幼い頃の名前）といひて愛でたといひます。

秀吉は、政盛の生い立ちを聞き、大いに親近感を持ったようす。しかし百姓の子として育った政盛は、行儀がよくありません。秀吉は政盛に、大名としてのたしなみを身につけるよう命じます。結局、政盛は8年間も京都に留め置かれ、大名としてのたしなみを仕込まれました。その間、田中清六には随分お世話になったようす。すでに、田中清六は、徳川家康の腹心になっていました。

立派な青年武將に成長した政盛は、角館に帰国の途中「会津の上杉に謀反の用意あり」と、貴重な情報を家康にもたらし、賞されています。

政盛が角館に着くと、道盛はじめ家臣団、領民は大喜びで出迎えます。

「政盛様じゃ。立派になられて」

「在りし日の盛安様と、瓜二つじゃ」

「鬼九郎が、戻ってきたぞ」

と領民の中には、涙を流す者もありました。そんな中、遠い松の木の影から、あのさん子も成長した我が子の姿を眺めていました。

時代は、風雲急を告げます。秀吉の死後、権力争いから徳川家康率

いる東軍と、石田三成率いる西軍が激しく対立し、美濃国（岐阜県）

関ヶ原で激突します。もとより徳川家康に心を寄せていた政盛は、東軍

につきます。情勢が家康に傾いている中、石田三成らの家康征伐計画

が進められていました。その計画を知った政盛は、恩義に報いようと家康

に報告します。政盛は関ヶ原の戦いそのものには、直接参加しませんでした

したが、こうした事前の働きが認められ、慶長7年（1602年）、常陸国（茨

城県）小川城に国替えとなり、その後、高萩の松岡城の城主になりました。

当時、政盛のように、外様大名から譜代大名への格上げは異例のこと

で、家康の政盛に対する信頼が、一通りでなかったことがわかります。

【母と子】

角館を発つ前、政盛は、ひそかに実母さん子のもとを訪れます。

「おかか様も、私と一緒に常陸国（茨城県）へ行きませんか」

と誘います。しかし、さん子はこれを断ります。

「私はここで、とと様（東光坊）のお墓を守ります」

「かか様…」

「ここに残っていても、私は、いつもそなたのことを思っていますよ。そな

たもたまには、かか（母）やとと（父）のことを思い出しておくれ」

さん子は一緒について行きたかったのですが、足手まといになることを

心配し、それを拒こばみました。これが今生こんじょうの別れとなることでしょう。去り行まさもりく政盛なに、亡き盛安もりやすの後ろ姿が重なります。丘の上の桜は、何もいわず風に揺れていました。

先祖伝来せんぞでんらいの土地を離れ、新天地に向かう一行の中に、祖父道盛みちもりの姿がありました。80歳近い高齡こうれいを心配した家臣の中には、角館かくだてに残るよう進める者もいましたが、

「年寄りには、寒かくだてい角館ほねみは骨身にこたえる。暖かい常陸ひたちの方が暮くらしやすい」

と、うそぶき、一緒いっしょに行くことになりました。

松岡まつおかに来てから4年後、老衰ろうすいが目立つようになった道盛みちもりも、ついに死のとこ床むかを迎えます。夢枕ゆめまくらに、あの櫓岡後家ならおか ご けが現あらわれました。

「道盛みちもりや…道盛みちもりや」

「…母上ははうえ」

「そなたは、十分い生きられた。そろそろ私のもとに参らぬか。盛安もりやすも光盛みつもりも待っておるぞ」

「せがれどもが…」

亡き息子な むすこたちも生きていれば、今頃いまごろは立派りっぱな青年大名せいねんだいみょうに成長していたちがに違いない。

「^{みちもり}道盛や、そなたは^{まさもり}政盛をよく育ててくれた。今では、^{しょうぐんけ}将軍家さえも^{いちもく}一目

^お置く存在になったと申すではないか。礼を言うぞ」

「^{ははうえ}母上、それは私ではなく、^{ちゅうぎ}忠義に^{あつ}厚い^{かしん}家臣たちや、^{りょうしゅおも}領主思いの^{りょうみん}領民たち
のおかげです」

「^{みちもり}道盛よ、ここに^{まい}参るがよい。ここで、待っておるぞ」

「^{ははうえ}母上…」

夢から^さ覚めると、心配してのぞき込む、^{まさもり}政盛の顔がありました。

「おじじ様、お体の^{ぐあい}具合はいかがでしょう？」

「^{だいじ}大事ない」

「それは何より」

「^{まさもり}政盛、わしは夢の中で、わしの^{ははうえ}母上にお会いしたぞ」

「^{おお}大ばば様に？」

「^{ぬし}お主のことを^ほ誉めていた」

「そうでしたか。一度お会いしとうございました」

「^{きび}厳しい、^{ひと}お人ぞ」

「ますます、お会いしとうございました」

「ハハハ、^{さよう}左様か」

^{じょうか}城下では、小鳥がさえずっています。

「もう角館は、雪が消えている頃かのう」

「そうですね。今頃は、ばっきゃ(ふきのとう)が生えている頃でしょうか」

「ばっきゃか…」

それから数日の後、うららかな早春の朝、道盛は眠るように、この世を去っていきました。

【新庄へ】

松岡での生活も慣れてきた頃、政盛に幕府から出羽国新庄(山形県)へ国替えを命ぜられます。新庄の周りには、伊達、上杉、佐竹、南部など、今だ幕府に心から服従していない大名がいます。この諸大名を監視する役目として、幕府は信頼のできる政盛を置こうと考えたのでしょう。

政盛は当時38歳、不思議な巡り合わせのもとに生まれ、辛く苦しい経験を重ねてきた彼は、今や世間の事情、人情がわかり、政治に通じる青年大名に成長していました。

新庄に入る前に、真室川町の鮭延庄真室城に入りますが、その3年後に新庄城を築城します。本丸中央に天守閣を設け(後に火災により焼失)、周りに土塁と堀を巡らし、城内に天満宮を配置した、立派なお城でした。さらに、城下町を整備し、領内の大規模な新田開発や鉾山開発を行い、生産力を高めていきました。政盛らの努力によって、新庄藩の基

礎は、立派に築かれていったのです。

【亡き父との思い出】

角館を出発してから約40年。かつての青年大名政盛も、いまや老年に差し掛かりました。体の衰えが目立ち、病に伏すようになります。温暖な松岡とは違って、雪深い新庄は年老いた体に堪えました。しかし、見渡す山々は、どこことなく、ふるさとと同じ匂い空気を感じます。

幼い頃を思い出したのでしょうか。家臣たちに、養父の東光坊について語っています。

「私がまだ小さくて角館にいた頃、畑は川の向こう側にあった。父東光坊が私を畑に連れて行く時は、種入れの大きなひょうたんを私の首にかけてくれた。父上が私の手を引いて川を渡るのだが、私の足が届かないところまで来ると、ひょうたんのおかげで、体がぶかぶか浮いて、父上におんぶしてもらい川を渡った」

と、ふるさとでの出来事を懐かしむ、政盛の姿がありました。

ひと伝えに聞くとところによると、実母さん子は、最期までふるさとの地で百姓として生き、天寿を全うし、あの桜の見える丘の、父東光坊の隣に埋葬されたといわれています。

「あの山の向こうには、愛する父母が眠っている。帰りたい…帰れない。」

近くて遠い我がふるさと…」

政盛は一つ、大きく息を吸います。

「これも、戦国の世に生まれた者の運命か」

亡き両親との思い出を胸に、動乱の世を生き抜いた政盛は、愛する父と母が待つ、冥土に旅立っていきました。

【それからの角館とそれからの戸沢氏】

戸沢氏が角館を去ってから、新たな領主に、芦名義勝(秋田藩主佐竹義宣の弟で、芦名家養子)が入ります。家盛が築城した角館城下は、現在の城下町とは反対の、古城山の北側、本町に整備されました。

義勝は、「一国一城令」により、角館城の破却をきっかけに、城下町を古城山の南側の現在地に移すことに決めました。しかし、芦名氏は3代で断絶してしまいます。これに代わり、佐竹北家(秋田県知事佐竹敬久のご先祖)が角館を統治します。当主の佐竹義隣は、京都の公家から養子に入ったことで、角館に京都の文化が花開きました。

新庄に移った戸沢氏は、政盛の後11代続きますが、最後の藩主戸沢正実の代に、戊辰戦争が起こります。

31代 ^{まさぎね} 正実

～ラストサムライの^{とうひこう}逃避行～

^{え ど じ だ い}江戸時代の終わり、^{とくがわ}徳川を中心とする^{きゅうばくふぐん}旧幕府軍と、天皇を中心とする
^{しんせいふぐん}新政府軍の戦い、^{ぼしんせんそう}戊辰戦争が起こります。^{しんじょうはんしゅとぎわまさぎね}新庄藩主戸沢正実もいやおう
なしに、この戦いに巻き込まれました。

^{とうほくかくはん}東北各藩のほとんどが、^{きゅうばくふぐん}旧幕府軍に味方しますが、^{あきたはん くぼ たはん}秋田藩(久保田藩)
だけは、^{しんせいふぐん}新政府軍に味方します。^{まさぎね}正実もはじめ^{きゅうばくふぐん}旧幕府軍についていまし
たが、やがて^{しんせいふぐん}新政府軍に移ります。^{しょうないはん}庄内藩を中心とする^{きゅうばくふぐん}旧幕府軍は、^{いか}怒り
^{くる おおなみ}狂い大波のような勢いで^せ攻めてきました。

^{しんじょうじょう}新庄城は、^{じょうかまち}城下町もろとも、黒い煙と共に^{や お}焼け落ちます。戸沢氏の
^{ほんきょち らくじょう}本拠地が落城したのは、^{しずくいし}滴石(雫石)以来のことでした。^{まさぎね}正実は、ここで
^{たんとう にぎ}腹を切ると短刀を握りますが、^{かしんかわべいおり}家臣川部伊織が、

^{との}「殿、まずは秋田へ逃げましょう。秋田は先祖の地でもございます。かつ
^{かねもりこう おおう}て兼盛公も奥羽の山を越えてから、運が開けたではありませんか」

と言って、^{たんとう と}短刀をはぎ取って^{まさぎね じょうがい}正実を城外へ逃がしました。

^{まさぎね}正実は、歴代先祖をまつる^{みたまや}御霊屋に^{さんけい}参詣する間もなく、ただ遠くから
^{どげぎ}土下座して、

「^{せんぞさま}ご先祖様、申し訳ございません」

れいはい
と礼拝し、別れを告げました。

まさかね
正実ら一行は、夜通しで峠を越え秋田に入ります。やしゅう おそ
夜襲を恐れ、明
かりをつけず、案内人のちょうちん ひと
提灯ただ一つで逃げました。

かくだて かみひのき ない あ に ふ た つ い
その後も北上し、角館から上桧木内、阿仁を越え、二ツ井から秋田に入
りました。あ に とちゅう かどやどうめ き かどやじょうし まさ
阿仁へ向かう途中、門屋道目木付近から望む門屋城址に、正
かね
実はどんな気持ちだったのでしょうか。

しんせいふぐん
最初は不利だった新政府軍も、秋田に続々と味方軍が入ってくると、
きゅうばくふぐん てったい
旧幕府軍は次々に撤退します。その結果、2ヶ月半ぶりに、しんじょう ふ
新庄の土を踏
むことができました。

めいじいしんご
【明治維新後の戸沢氏】

まさかね まさおと しんじょう れきにん けいざぶろう
正実の孫、正己氏は新庄市長を歴任し、その養子の奎三郎氏はソニー
に入社し、1980年代にリチウム電池を開発しました。とうしゅ みつる
現当主の充氏は、
けいざぶろう ともこ むすめむこ
奎三郎の娘友子さんの娘婿で、現在東京都にお住まいです。

らいぼう かどやじょうし
2015年に、ご夫婦で仙北市西木町にご来訪され、門屋城址の前で
こやまだ
「小山田ささら」をご覧になりました。とうしゅとざわいえもり
13代当主戸沢家盛がこの地を去っ
たあの日から、約600年の歳月が経っていました。

ひでもり みづか とざわ こ
また、初代衡盛が、自らの姓を『戸沢』と改めてから、800年を超える
さいげつ
歳月が流れていました。

おわり

参考資料

- ・西明寺村郷土志～復刻版(西木村教育委員会・弘文堂印刷所・平成3年2月)
- ・西木村郷土誌(西木村郷土史編纂会/西木村・株杜陵印刷・昭和55年8月1日)
- ・大曲・仙北・美郷の歴史(富木耐一監修・株式会社郷土出版社・2006年8月4日)
- ・角館町の成立と町割りについて
(仙北市角館町文化財保護協会編集/発行・田口本店・2020年10月31日)
- ・マンガで見る 近世大名 初代 松岡藩主『戸沢政盛公物語』
(高萩市市長室・ふじえだ印刷・平成25年2月14日)
- ・戦国の武将 戸沢氏と西木 (広報にしき号外・平成8年)
- ・新田沢湖町史
(新田沢湖町史編纂委員会/田沢湖・株ぎょうせい・平成9年3月25日発行)
- ・秋田の歴史(新野直吉/秋田魁新報社・昭和57年4月10日発行)
- ・角館誌 第二巻
(「角館誌」編纂委員会/「角館誌」刊行会河原田次剛・昭和40年12月1日発行)
- ・角館城下の歴史(林正崇/無明舎出版・昭和57年12月10日発行)
- ・古戦場 -秋田の合戦史- (秋田魁新報社/昭和56年7月25日発行)

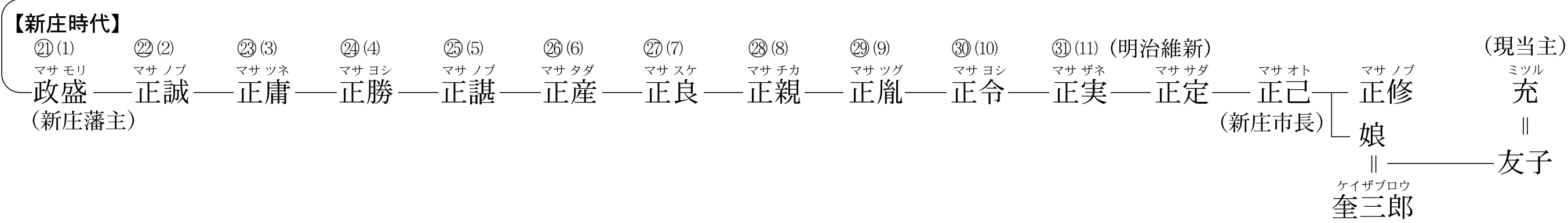
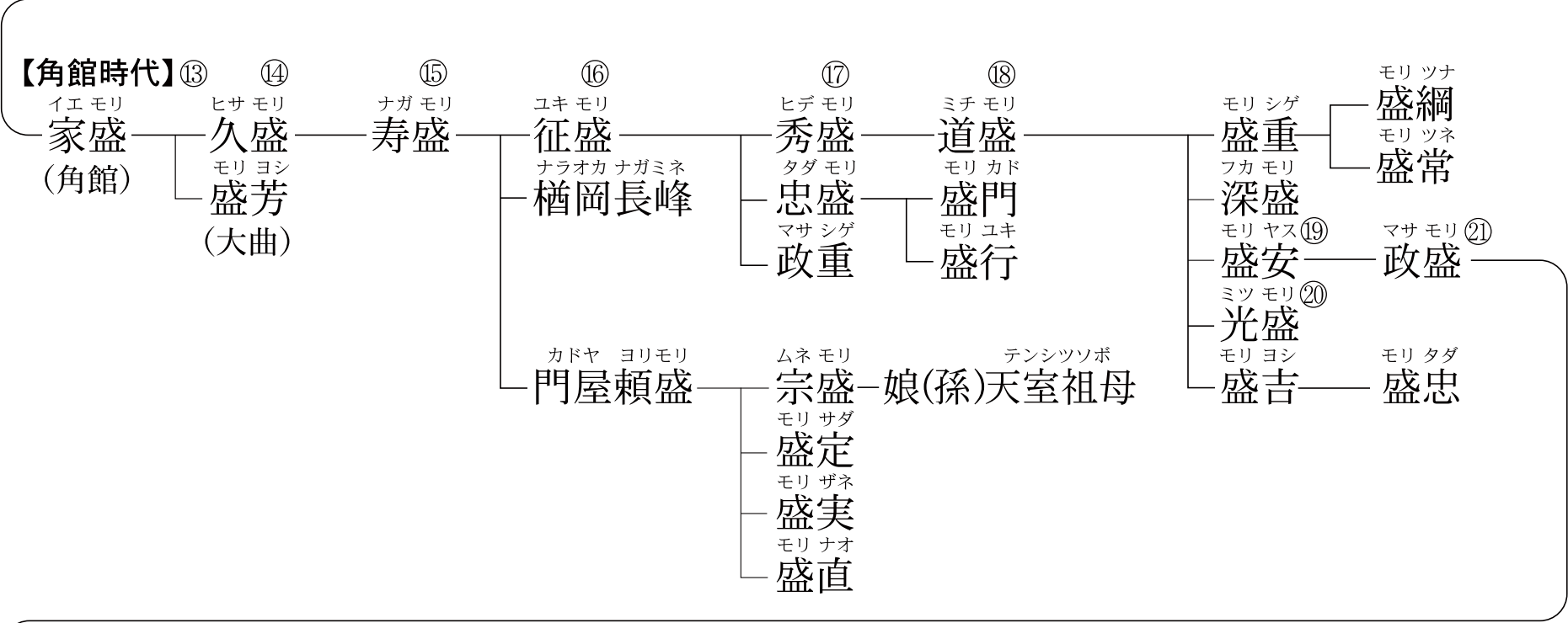
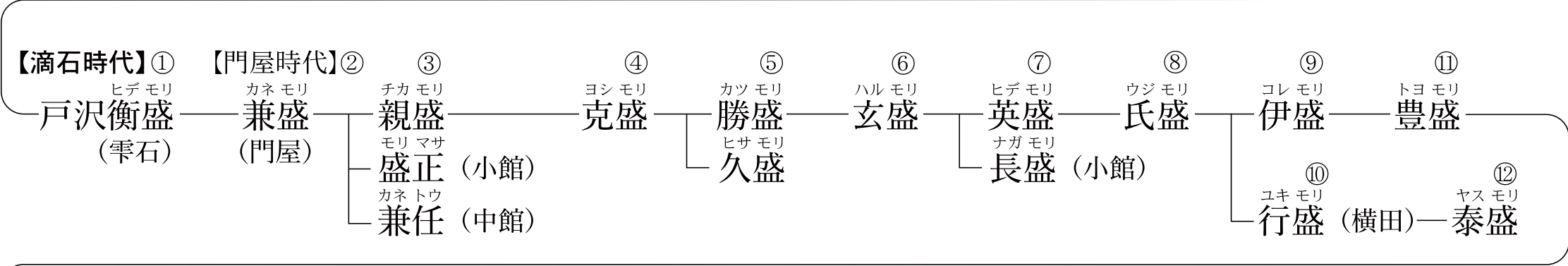
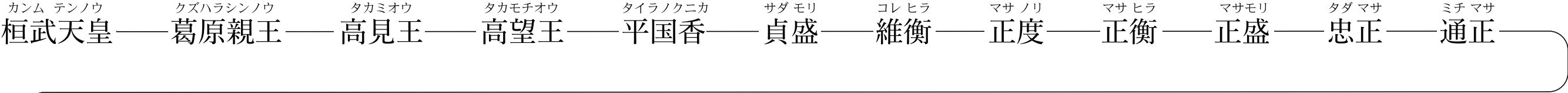
=順不同

◎戸沢氏年表（系譜に見る戸沢氏）

時 代	西 暦	年 号	歴代城主	記 事（できごと）
平安 時代	1157	保元 2	初代 衡盛	大和（奈良県）尾輪に生まれる。
	1177	治承元	初代 衡盛	木曾義仲の家臣となる。
	1184	元暦元	初代 衡盛	源頼朝より奥州滴石（岩手県雫石）戸沢に領地を賜り、姓を「戸沢」に改める。
	1191	建久 2	2代 兼盛	滴石戸沢郷に生まれる。
鎌倉 時代	1199	正治 7	2代 兼盛	父衡盛が死去（享年43歳）。
	1206	建永元	2代 兼盛	滴石から出羽鳳仙岱（秋田県玉川）へ移る。
	1220	承久 2	2代 兼盛	小館城（石川原）に入る。
	1228	安貞 2	2代 兼盛	門屋城に移る。以後13代の家盛まで約200年間門屋在城。
	1262	弘長 2	2代 兼盛	兼盛死去（享年73歳）
南北朝 時代	1331	元弘元	6代 玄盛	足利尊氏軍と戦うも、門屋に帰る。
室町 時代	1354	文和 3	8代 氏盛	白岩氏と戦う。白岩氏は戸沢氏の家臣となる。
	1423	応永30	13代 家盛	夢のお告げにより、門屋城から角館城へ移る。以後、家盛より政盛まで9代にわたり170年間角館在城。
	1423	応永30	13代 家盛	「小山田ささら」が村人によって踊られる。
	1424	応永31	13代 家盛	夢のお告げにより「霞の鞭」を得る。
戦国 時代	1529	享禄 2	18代 道盛	父秀盛の死去に伴い、叔父忠盛が道盛に代わり政務をとる。
	1532	天文元	18代 道盛	叔父の忠盛が角館城乗っ取りに失敗し、淀川城へ撤退する。
	1542	天文11	18代 道盛	角館城が小野寺軍に攻められる。（角館城包囲戦）
	1543	天文12	18代 道盛	櫓岡、本堂、白岩等の援軍を得て小野寺軍退却する。
	1566	永禄 6	19代 盛安	盛安（鬼九郎）、角館に生まれる。
安土 桃山 時代	1578	天正 2	19代 盛安	道盛が子の盛安に当主をゆずる。
	1579	天正 3	19代 盛安	前田薩摩が戸沢氏の名代で織田信長に鷹を献上するも、その留守に赤尾津・羽川軍に大曲城を攻められ落城する。
	1584	天正12	19代 盛安	横手の小野寺軍を破る。（阿気野の戦い）
	1587	天正15	19代 盛安	秋田の安東軍を破る。（唐松野の戦い）
	1590	天正18	19代 盛安	遠江国（静岡）で、豊臣秀吉と対面し、『備前兼光（脇差）』と所領安堵を賜る。（小田原参陣）
	1590	天正18	19代 盛安	小田原陣中で急死。（享年24歳）
	1590	天正19	20代 光盛	当主となるが、戸沢安房が反乱を起こし門屋宗盛を殺害するも家臣団の一致団結により、戸沢安房を追放する。
	1590	天正19	20代 光盛	豊臣秀吉、光盛を家督相続（角館城主）を認める書状をだす。
	1592	文禄元	20代 光盛	朝鮮出兵に動員され、九州へ向かう途中、播州国（兵庫県）姫路で天然痘にかかり死去。（享年17歳）
	1592	文禄元	21代 政盛	政盛、家督を相続する。実母さん子のもとを訪れ桜を植える。

時 代	西 暦	年 号	歴代戸沢氏	記 事（できごと）
安土 桃山 時代	1592	文禄元	21代 政盛	上洛し、豊臣秀吉と対面。本領安堵の朱印書賜る。その後、8年間京都で大名としての教育を受ける。
	1599	慶長 4	21代 政盛	大名としての教育を終えて、京都から角館に帰国の途中、会津の上杉家の動静を徳川家康に報告し賞される。
	1600	慶長 5	21代 政盛	関ヶ原の戦いで、政盛は徳川家康に味方し酒田を攻撃する。
江戸 時代	1602	慶長 7	21代 政盛	常陸（茨木県）小河へ国替えとなる。後に松岡城へ移る。
	1603	慶長 8		芦名義勝が角館城に入る。
	1604	慶長10	21代 政盛	道盛、孫の政盛らに看取られ死去。（享年80歳）
	1620	元和 6		一国一城令により角館城は破却。秋田、大館、横手は残る。それを機に、芦名氏は城下町を本町から勝楽村に移す。
	1622	元和 8	21代 政盛	出羽（山形県）新庄へ国替えとなる。
	1648	慶安元	21代 政盛	新庄で死去。（享年63歳）
	1656	明暦元		芦名氏に代わり、佐竹（北家）義隣が角館に入る。
	1868	慶応 4	31代 正実	正実、戊辰戦争で庄内藩を中心とする旧幕府軍の攻撃により新庄城落城。一旦、出羽（秋田）へ逃亡するも、その後、味方軍の援護により、旧幕府軍は撤退し、再び新庄に戻る。

戸沢氏系図



お願い

この物語の内容に関する問い合わせやご意見等については、ファックス又はお手紙で西明寺小学校宛に送信してください。読者のみなさんへの対応は、私たち推進員が責任を持って対応しますので、返信先も忘れず記入してください。

なお、電話での問い合わせ等は、授業に支障をきたすことが想定されるためご遠慮くださるようお願いいたします。

令和6年3月25日

西明寺小学校地域学校協働本部